

平成20年度岡山県指定重要文化財等の指定案件

種 別	名称・数量	所有者・所在地等	説 明
1 重要文化財 建造物	<small>ほんげん じたまや おもてもん</small> 本源寺霊屋、表門及び津 <small>やまほんしゅもり けい いちもんほか</small> 山藩主森家一門墓 2棟・7基 <small>つけたりさんどう いしどうろう</small> 附 参道、石灯笼 2基	宗教法人本源寺 津山市小田中	津山藩主森家の霊廟建築と大型五輪塔墓 本源寺は慶長12年（1607）建立された津山藩主森家の菩提寺。装飾性あふれる霊屋と表門は、寛永16年（1639）の建立で、江戸前期の霊廟建築として貴重である。霊屋背後には森忠政等の大型五輪塔墓があり、石敷の参道や石灯笼とともに、津山藩主一門の菩提所としての威厳を保っている。
2 重要文化財 建造物	<small>むなかつじんじゅうりい</small> 宗形神社鳥居 1基	宗教法人宗形神社 赤磐市是里	県内で3番目に古い年紀のある鳥居 凝灰岩製の明神鳥居で、高さ3.7m。額東に「享徳二年癸酉八月建立」（享徳2年は1453年）の銘文があり、年紀のある鳥居としては県内で3番目に古い。また、建立当時の状態を非常に良く残しており、貴重である。
3 史 跡	<small>しょうぶざこふん</small> 勝負砂古墳 1基	個人所有 倉敷市真備町下二万	未盗掘の竪穴式石室が発見された小田川流域の有力者の墓 5世紀後半に築造された全長42mの前方後円墳。未盗掘の石室からは、武器や馬具等大量の副葬品が出土しており、吉備と大和や朝鮮半島南部との関係を考える上で重要な古墳である。

【 1 】

- 1 種 別 重要文化財 建造物
- 2 名称及び員数 ほんげん じたまや おもてもんおよ つけたりさんどう いしどうろう 本源寺霊屋、表門及び津山藩主森家一門墓 2棟・7基
附 参道、石灯笼 2基
- 3 所 在 地 津山市小田中1373番地
- 4 所 有 者 宗教法人本源寺 代表役員 華山 義道
- 5 構造及び形式 霊屋 桁行3間、梁間3間、一重、宝形造、向拝一間向唐破風造、銅板葺
表門 四脚平唐門、銅板葺
津山藩主森家一門墓 石造五輪塔
- 6 建 築 年 代 霊屋、表門 寛永十六年（「武家聞伝記」巻十四）
墓、参道、石灯笼 17世紀中～後期
- 7 説 明 本源寺は、元は慶長12年（1607）に津山藩主森忠政が移転した龍雲寺りゅううんじで、天和3年（1683）の忠政の50回忌に当たり忠政もりただまさ

の院号に因み改称されたものである。

現在、森忠政ら28基の位牌を祀る靈屋は、三間四方、宝形造、背面半間庇付き、一間向拝付き（向唐破風造）で、屋根は銅板葺である。靈屋本体は全て角柱とし、側まわりに舟肘木を用いる他は組物はない。これに対し向拝は、唐草文様の木製垂木端飾り、頭貫の亀甲花菱文様地紋彫、木鼻の青海波文様、柱頂部に胡麻殻決り金欄巻きの浮彫など装飾性にあふれている。内部は、中央二間四方を上段、その後方に仏前、位牌壇などが設けられている。

表門は、四脚平唐門形式、銅板葺である。頭貫地紋彫など緻密な装飾がなされている。

靈屋の建立年代は、「武家聞伝記」の記事から寛永16年（1639）と考えられ、表門の建立時期も同時期と見られる。靈屋は、平成18・19年度に解体修理が実施された。なお、入側腰障子腰張の菊籬図は、文化年間（1804～1818）頃の中央画壇における洗練された作風を示している。

靈屋の背後には、森家一門7人の五輪塔墓がある。西から晃昌院（於菊、森忠政娘）、智勝院（於岩、森忠政妻）、本源院（森忠政）、雄心院（森長可）、靈光院（森忠継）、碧松院（森忠政姉・関成次母）、光徳院（関成次・森忠政甥）と並ぶ。基礎石組は凝灰岩の切石を用い、五輪塔は花崗岩製である。やや小型の碧松院の墓を除き全体の高さは4mに達する。中でも参道の正面にある森忠政墓は5・15mと大型で、墓前には2基の石灯籠も残されている。また、表門から靈屋及び森家一門墓に至る凝灰岩製の石敷参道は、靈屋及び墓の造営に伴い、17世紀中期から後期にかけて順次整備されていったとみられる。

靈屋、表門及び墓ともに、国持大名である森家一門の菩提所としての威厳を保ち、すでに県指定重要文化財となっている妙法寺本堂や愛染寺鐘楼門などとともに、江戸時代前期の津山における高い技術水準を示す建造物である。

※向拝……社殿や仏殿の正面階段の上に張り出した庇の部分。参詣者の礼拝する所。

舟肘木……柱上に肘木（上からの過重を支える横木）のみをのせて桁を支えるもの。

頭貫……柱上に溝を掘り、柱の頂部から落とし込み、柱を横につなぐ材。

木鼻……頭貫などの端が、柱から突き出した部分。そこに彫刻を施したもの。

胡麻殻決り……柱などの表面に、縦に並べて彫りつけた溝。また、その細工。

金欄巻き……堂門の柱などの上部に、あたかも金欄の布をかけたような絵画装飾を施すこと。

籬……竹・柴などを粗く編んでつくった垣。

【 2 】

1	種 別	重要文化財 建造物
2	名称及び員数	宗形神社鳥居 1基
3	所在地	赤磐市是里3235番地
4	所有者	宗教法人宗形神社 代表役員 門野 得
5	形式	石造明神鳥居
6	建築年代	享徳2年（1453）
7	説 明	宗形神社はいわゆる式内社の一つとされ、戦国期には備前東部を影

響下に置いた天神山城主浦上宗景の崇敬を受けたとされ、江戸時代には岡山藩から社領の寄進を受けていた。

鳥居は神社境内の東端にあり、高さ約3.7m、幅約4.9mを測る石造の明神鳥居である。石材は凝灰岩の中でも緻密な材質のものを^{みづのとりに}用い、粗いたたき仕上げとなっている。額束の裏面には、「享徳二年癸酉八月建立」の銘文があり、享徳2年(1453)に建立されたことが分かる。年紀のある鳥居としては、^{おうえい}康安元年(1361)の岡山市下足守の八幡神社鳥居、^{こうあん}応永28年(1421)の倉敷市児島通生の本荘八幡宮鳥居に次ぎ、県内で三番目に古い。

中世の宗形神社に関する重要な資料であるとともに、保存状態が非常によく、吉井川中流域における室町時代神社建造物として貴重である。

【 3 】

- 1 種 別 史跡
- 2 名称及び員数 勝負砂古墳 1基
- 3 所在地の地番、地積及び地目
倉敷市真備町下二万字勝負砂1290番、 406㎡、畑
倉敷市真備町下二万字勝負砂1292番、 597㎡、山林
倉敷市真備町下二万字勝負砂1293番、 20㎡、墓地
倉敷市真備町下二万字勝負砂1294番、 860㎡、畑
計 1,883㎡
- 4 所有者等 個人
- 5 説 明 勝負砂古墳は、平成13年度から19年度にかけて岡山大学考古学研究室により調査が行われた。調査の結果、全長42mの帆立貝形を呈する、5世紀後半に築造された前方後円墳であることが明らかになり、さらに後円部中央からほぼ完全な形で残された未盗掘の竪穴式石室が発見された。
竪穴式石室は、内法長3.59m、最大幅約1.2m、高さ約0.6mを測る。この石室は、墳丘を完成させた後に墓壇を掘り込んで構築するのではなく、先に石室を作り葬送を終えた後に墳丘土を盛るといふ、通例とは逆の特異な手法で構築されている。
石室内からは、ほぼ埋葬当時の状況で銅鏡をはじめとする大量の副葬品が発見された。副葬品は、短甲、刀剣、轡など、武具・武器・馬具類を中心としており、なかでも短甲は大和勢力との軍事的結びつきを示すものである。また、特異な石室の構築法や馬具の形態などは、朝鮮半島南部との繋がりを窺わせる。
このように勝負砂古墳は、所在する小田川流域の歴史だけではなく、未解明部分の多い5世紀後葉から6世紀にかけての吉備と大和そして朝鮮半島南部との関係や、さらには当時の葬送儀礼を研究する上で重要である。